

中学校における平和教育の実践と今後の課題

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

1. はじめに

2003年3月20日 アメリカによるイラク攻撃がはじまった。同じ日、教育の憲法ともいえる教育基本法の改悪にむけ中教審答申（「愛国心」などを明記）が出された。

終戦から58年目をむかえ、多くの教師の思いを集め創りあげてきた平和教育はどのように実践され、子どもたちの心の中に「平和のとりで」を築いてきたのか。戦後の国内外の情勢の変化の中で、個々の教師の「二度と悲惨な戦争を起こしてはならない」「教え子を再び戦場へ送らない」という自覚的な思いが大きな河の流れになり、父母・地域・国際的諸活動団体との連携の中で豊かに発展してきた。

「私たち人類は今、戦争か平和かの分かれ道に立っている。」と言っても過言ではない。アメリカやその同盟国の側に立ち世界の人々を戦争の恐怖に巻き込むのか、それとも、人類の過去の歴史に学び、侵略戦争を許さず「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」国連を中心とした国際紛争の解決の道により、世界の平和をめざすのか。人類ひとり一人に課せられた重大な課題である。

私は、本研究で、わが国の戦後の平和教育のあゆみをたどり、その到達点を、平和教育の理念と目標、方法的視点として明らかにし、中学校で行われた自らの拙い平和教育の一実践と直近の他の実践を学ぶことにより、今日の平和教育をめぐる状況を中学校の教育現場から考えてみたい。人類の希望を胸に、真の平和を実現する実践を追究したいと思う。

2. 各章・節ごとの要約

序 章

アメリカによるイラクに対する侵略戦争は、今までの平和教育を問い直すできごとであった。私たち国民が営々として積み重ねてきた平和教育の営み（実践）は、なんだったのか。また、今日の子どもの課題とも人権・平和教育は関連しており、国際的な平和教育の研究も進んでいる。平和教育の今を、中学校での実践を中心に考えていく。

第一章 平和教育のあゆみとその到達点

第一節 戦後のわが国における平和教育のあゆみ

戦後のわが国の平和教育の歴史を、中心的な教科としての社会科を中心に、平和教育の区切りを参考に、7つの時代にわけ実践の特徴とともに時代背景になった社会状況などを整理した。

第二節 今日における平和教育の到達点

連綿と続いてきた平和教育実践が「教え子を再び戦場へ送るな」の旗印の下、国民教育研究所によってまとめられた。平和教育の理念、具体的目標、実践上の視点や方法的視点

などに、今日の平和教育の到達点を見いだすことができる。

第二章 平和教育の実践

第一節 被爆地ヒロシマを訪ねる修学旅行

具体的実践例として、私の拙い実践を検討する。1980年代終わりから90年代はじめにかけての実践で、その時代の様々な制約を受けてはいるが、ひとつのタタキ台になると思う。

第二節 他の実践に学ぶ

他の実践として、現在取り組まれている本庄氏の「新ぼくらの太平洋戦争」の実践から、平和ミュージアム見学と留学生との対話、戦争体験の聞き取りなどの実践を分析した。

終章 平和教育の展望と今後の課題

第一節 平和教育プラン

2002年度の新教育課程の「総合的な学習の時間」をも利用して、現時点での平和学習のプランを立てた。現実には、学校内外の事情やさまざまな困難が存在するであろうが、視点を明確にし、ひとつでもふたつでも実現していけたら・・・と考えている。

第二節 今後の課題

厳しい今日の政治状況の中で、私たち人類が緊急かつ誠実に取り組まなければならない課題に「核廃絶」の課題がある。そして、それにつながる人権・経済格差などの課題がある。世界史的大変革時代をむかえた人類の課題は……。国際的には、国連を中心とした国際法等のルールに則って、国内的には、日本国憲法や教育基本法に依拠して、人間相互の課題を解決していく道筋が重要である。

3. おわりに

研究に一段落をつけてみると、様々なことがよみがえってくる。やはり、直接の動機である2003年3月20日の2つのできごとである。偶然の一致であろうが、私には、それらが結びつけられて、心穏やかでいられない。丁寧で実証的な論文とは言い難いが、思いの丈を吐き出した気持ちはある。ご教示・ご批判いただきたい。